

雷神も 少し動みて さし曇り

雨も降らぬか 君を留めむ

柿本人麻呂歌集(巻十一・二五二-三)

いよいよ梅雨の季節となりました。不快指数の高いこの季節はあまり好きではありませんが、雨音をじっと聞いていると、まるで音楽のように感じられる時があります。傘に落ちる雨粒の音や、雨が木々の葉や屋根を打つ音などをぼんやり聞いている時間が、私ほどでも好きです。今回は、雨にちなんだ男女のやさしい恋の歌をご紹介します。

この歌の作者は女性です。彼女は、共に一夜を過ごした恋人が帰ろうとする時に、「雷が鳴って雨でも降ってくれないかしら」とつぶやくように願います。雨が降ってしまえば、男性は彼女のもとでしばし雨宿りをしなければならぬからです。「雷神の少し動みて」の「少し」という表現は、恋人が帰り道

やまと 万葉がたり

に難儀するほどでなく、あなたが引き留めていいとしてあと「少し」でいいから一緒に居たいという、淡い期待であるように思えます。彼女の歌に対して男性が答えたのが、次の歌です。

雷神の少し動みて降らずともわれは留らむ 妹し留めば(二五二-四) 柿本人麻呂歌集) 男性は、「雷が鳴って雨なんか降らなくて、あなたが引き留めてくれるなら私も少しここに留まりましょう」と言います。彼女の小さなわがままを、彼はやさしく受け止めたのです。帰る男性を引き留めようとするのは女性の恋歌の一つのパターンですが、それに男

【訳】かみなりが少しとどろいて曇りはじめ、雨も降ってくれないかなあ。あなたを引き留められるだろうに。

「万葉集」の恋歌の多くは、さまざまな障害によって想いを遂げられなかった男女の、心の葛藤や嘆きの歌です。だからこそ今回のような恋愛の歌は、いっそうやわらかに聞こえてくる気がします。雨に降りこめられた日は、ぜひ「万葉集」を手にとり、万葉びとたちの心の声にも耳を傾けてみてください。

(県立万葉文化館主任 研究員・大谷歩) 原則、隔週掲載

# ひとり居て もの思ふ夕よひに

## 霍公鳥ほくととぎす 此ゆ鳴き渡る

## 心しあるらし

をほりだのひろみみ  
小治田広耳 卷八・一四七六

歌のように人間の恋の  
思いを託して表現され  
ることもあり、魂を運  
ぶ鳥とも考えられてい  
たようです。

万葉文化館の周辺に  
は、たくさん鳥がい  
ます。この時期にはス  
ズメはもちろん、ツバ  
メのさえずりとともに  
ウグイスやホトトギス  
の鳴き声も聞こえてき  
て、さわやかな気分に  
してくれます。

ホトトギスは、イン  
ドや中国から初夏にな  
ると日本列島までやっ  
てくる渡り鳥です。他  
の渡り鳥よりも渡来す  
る時期が遅めなのは、

ウグイスなどの鳥の巢  
に自分の卵を産む托卵  
の習性があり、対象と  
する鳥の繁殖が始まる  
のにあわせるためだそ  
うです。

夏の到来を告げる鳥  
として、文学作品の中  
にししばしば描かれま  
す。甲高く鋭い鳴き声  
が特徴で、さくらんぼ  
ばしの内側が赤いこと  
から、血を吐いて鳴く  
ともされてきました。  
「万葉集」の中でも

やまと  
万葉がたり

っとも多く歌に詠まれ  
た鳥もホトトギスで、  
約150首の歌が残さ  
れています。この歌の  
作者である小治田広耳  
は「万葉集」中に2首  
しか歌を残していませ  
んが、その2首ともが  
ホトトギスを詠んだ歌  
です。

この歌では、独りで  
過ぐす宵に、ホトトギ  
スの鳴き渡る声がか  
えてきた様子が描かれ  
ています。もの思いに  
ふけるのは、多くの場  
合、恋の悩みに根ざし  
ているようです。ここ  
でも会いたい相手のこ  
とを恋しく思っている  
とホトトギスが鳴きな  
がら遠くへいった、相  
かせることから、この

【訳】孤独に物思いにふける宵に、霍公鳥がここから  
鳴き渡っていく。霍公鳥は心があるらしいよ。  
（原立万葉文化館指導  
研究員・井上さやか）  
＝原則、隔週掲載